

参 考 情 報

令和6年度

アユ種苗放流における大型魚の有効性と効果的な放流密度

[要約] 大型アユの放流は、友釣り解禁直後の大型魚の釣果につながりやすく、放流密度*を3尾/m²程度とすることで費用対効果が大きくなる。

新潟県内水面水産試験場 資源課

連絡先

TEL 0258-22-2103

FAX 0258-22-3398

※放流密度：アユ人工種苗の放流尾数の合計/釣り場の面積

[背景・ねらい]

河川の多くのアユ釣り場では、小型の人工種苗（以下、「通常魚*」という。）が放流されている。一方、県内の一部の漁協では、アユ友釣り解禁直後に大型の人工種苗（以下、「成魚*」という。）を釣ってもらい、その宣伝効果により集客を高めようとする取組も行われており、通常魚の放流のほか成魚を放流している事例もある。現状では成魚放流の効果が不明であることから、A河川、B河川のアユ釣り場において、その効果を検証した。
※通常魚は、毎年5～6月上旬に、全長約10cmの大きさを数万尾が放流されており、成魚は友釣り解禁直前の6月中旬に、全長約15cmの大きさを数千尾が放流されている

[成果の内容]

- 1 A河川、B河川ともに友釣り期間初期（7月上旬～中旬）は通常魚よりも成魚が釣られやすく、成魚放流の有効性が確認された（図1）。友釣り期間中期から終期（7月中旬～9月中旬）に向けて成魚は釣れにくくなった。
- 2 成魚放流の費用対効果については、河川によって効果の大小があり、放流密度が高い河川では効果が大きくなった（B河川）。効果は、放流密度が3尾/m²程度の時に最大となり、それ以上となると小さくなった（表）。
- 3 成魚放流の直後に大水があった場合、河床勾配の大きい釣り場（B河川）では、成魚が下流に流されて、放流の効果が小さくなることが考えられた。一方、河床勾配の小さい釣り場（A河川）では大水の影響は小さく、安定的な効果が見込める（図2）。

[導入効果]

解禁直後に成魚が釣れることで遊漁者への宣伝となり、集客が期待される。

[導入対象]

内水面漁業協同組合

[留意点]

- 1 成魚放流の費用対効果を大きくするためには、通常魚、成魚を一カ所に集中放流するなどして、放流密度を3尾/m²程度に近づける必要がある。
- 2 同一河川内の複数の釣り場のうち河床勾配の大きな釣り場の場合は、大水により成魚が下流に流される可能性があるため、釣り場の河床勾配に注意する必要がある。

[具体的データ]

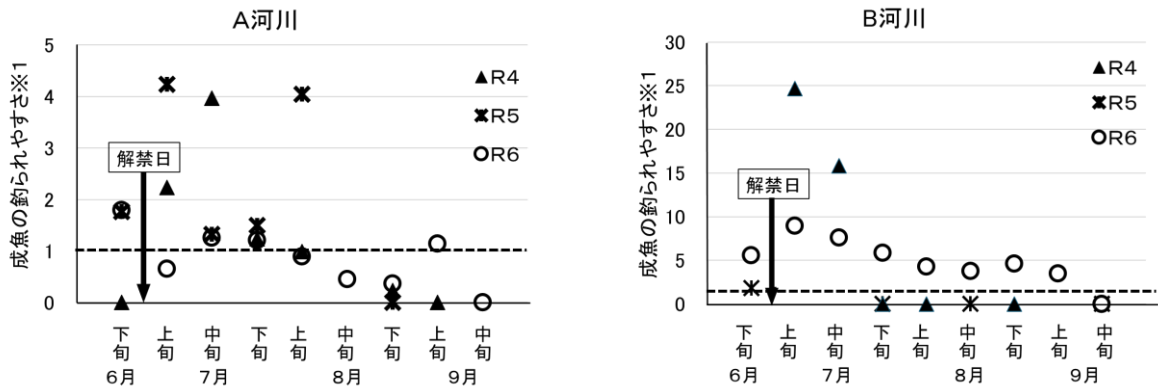


図1 月・旬別の成魚の釣られやすさ

※1 成魚の釣られやすさ：通常魚の回収率（釣獲尾数/放流尾数）に対する、成魚の回収率（釣獲尾数/放流尾数）。値が1を超えると、成魚が釣られやすかったことを示す。

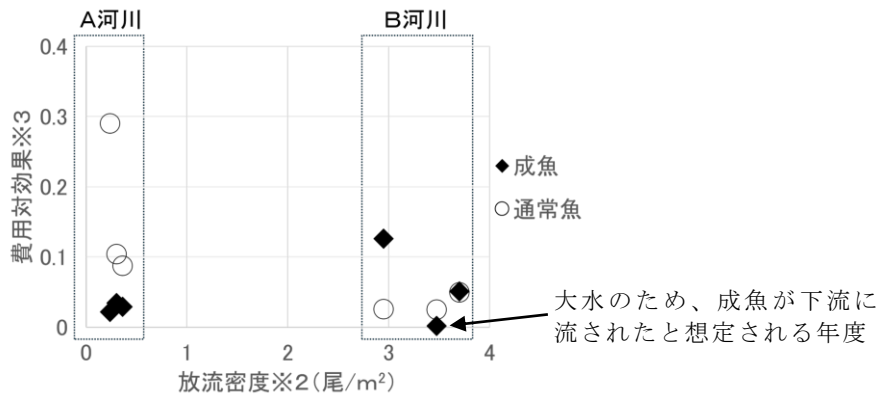


図2 2河川の釣り場の放流密度に対する成魚、及び通常魚の費用対効果

※2 放流密度：アユ人工種苗の放流尾数の合計/釣り場の面積
 ※3 費用対効果：1日1人当たりの推定釣獲尾数/放流経費1万円

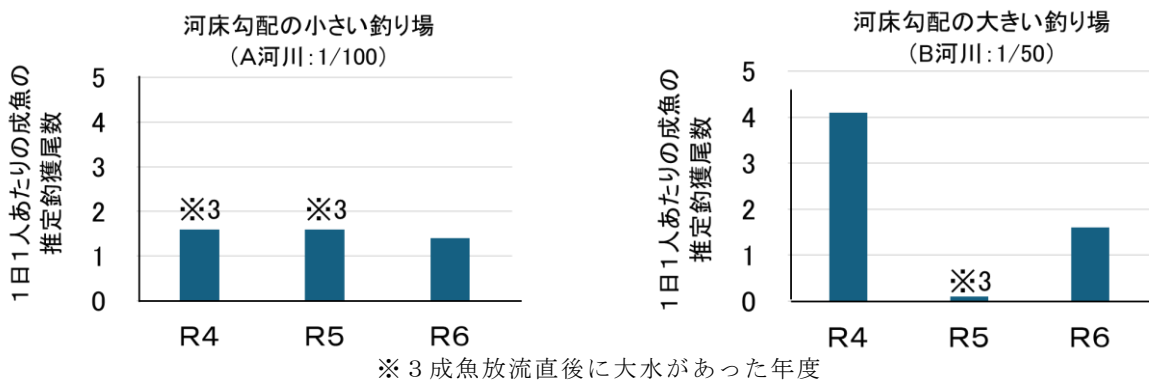


図3 年別・河川別の1日1人当たりの成魚の推定釣獲尾数

[その他]

研究課題名：内水面水産資源回復調査事業

予算区分：国交付金

研究期間：令和4年度～6年度

発表論文等：全国湖沼河川養殖研究会アユ資源研究部会報告書